大人社劇ワーマン・シアターvol.4　ワーマンシアター戦術!

1998年10月27日～31日　紀伊國屋サザンシアター

キャスト

ドモン……阿部サダヲ
アサコ……猫背椿
星ミノル……河原雅彦
星チヨコ……伊勢志摩
ローズマロン……大堀こういち
喜プミヤ……岩川猿時
吸口……宮藤官九郎
グランセ・ベルサーチ・げんこつ……荒川良々

スタッフ

作・演出……宮藤官九郎
舞台監督……福澤諭志＋五味田亨、高野宗機
照明……佐藤啓
音響……半田充（MMS）
衣装……田中亜紀
舞台美術……加藤ちか
振付……八反田リコ
映像……奥秀太郎
写真……澤李隆助
宣伝美術……吉澤正美
イラスト……篠崎貴紀
舞台監督助手……仁藤智浩、宗倉裕亨
演出助手……大塚光威、近藤和義、佐藤浩子
衣装助手……戸田京子、伊藤潤子、梅田和枝、加藤清映
小道具製作……宇野圭一、渡辺千穂、上原春子、森本宗宏
大道具製作……CICOM、長船製作所
小道具……高澤装飾美術
制作助手……河嶋ナツキ
制作……長坂まき子

あとがき

前回終わってから期間も空いてたし、大きい劇場だったんで、密室っていう設定とはちょっと違うのをやろうと思ったんです。岩井『自慢☆自慢』（94年）っていう芝居をやったんですけど、それに近いテイストでやりたいなって思って、メンバーを、いつも出てもらってる人と、荒川（良々）くんと、河原（雅彦）さんと、大堀（こういち）さんっていうわりとはけるる感じの人にしたんです。歳をとるとそういうはけた感じの芝居ができなくなるかなと思ったんですけど、やってみたらまだ全然大丈夫でした（笑）。

社会人の話をやろうと思ったんです。会社みたいな設定にしたことないなって思ってて。だから最初は、ちゃんと衛星チャンネルの話にしようと思ったんですけど、途中で面倒臭くなっちゃったんですよ（笑）。なんか派手なやつがやりたかったんで、とにかく色んな人が色んな役をやる話にしようと思いました。それと、ちょっとその頃バラエティの仕事を始めて、全員会議で若い思いをしてたんです。人前で意見を言えなくて、「ああ、今日も一言もしゃべれなかった」って思いながら、一言もしゃべってないのにタクシーで帰るっていう状況に馴染めなくて（笑）、自分がどうも役立たずみたいな気がして、それをどっかで解消したかったんで、岡部（サダヲ）くんを放送作家の役にしたんです。大堀さんは相棒がどんどん死んでいく呪われた芸人にしようと思って、河原さんは電気屋で、奥さんは元テレビのスターで、それを知らない振りして、家から出さないように囲ってるっていう。今までだったらこの設定だけで話作ってたんですけど、それをサブの話にして、衛星放送を軸に、みんながワーワーとなるみたいな話にしようと思って、あんまり整理せず作ったんです。そしたら岩川（猿時）くんが半分無だっていうあたりから、どこでもよくなって、イメージだけですね。岩川くんがでっかい無だったら面白いなあっていうだけ（笑）。それで水槽作りて、とか具体的になっていくにつれて、自分が何やりたいのか全然わかんなくなっちゃって。これは勢いで書いたみたいな台本だったんで、実は稽古初日に台本が全部あったんですよ。初めてなんですけど。

意外に笑いじゃないところでイイって思ったのが、河原さんと伊勢（志摩）さんのシーンで、伊勢さんが死んじゃいそうなのに、スポーツ新聞読むっていうのが、結構思いつきの割にはいいじゃんって思いましたね。それ以外のところは一個もわかんないですが、ホントコントみたいなもので、一本の芝居になんとなくなってればいいやって感じだったんですよ。最初の30分くらいで、このお芝居はこうですよっていうのはわからせたかったんですよね。だからわざと映像使ったりとか、紀伊國屋サザンシアター（上演された劇場）なのに、間違えて紀伊國屋ホールに行っちゃったとか、ネタを先にやればなんかいつもと違う感じになるかなあって思って、そんなにちゃんと見ても何も出てきませんよっていう気持ちにさせて、最後ちょっとどっかでホロッとさせればいいやっていう感じでしたね。こういうのもワーマンって言っていいんだっていう意味で、大きく違う方向に行ってみたんです。いつもそうなんですけど、なんか一個考えて帰ってくれればいいんです。話の筋を全部人に話せる芝居は一個もないと思うんですよ。いつもお客さんをびっくりさせたいんですよね。だから半分嘘だって言われて水槽に入れられてるけど、なんの説明もないっ。そういう説明しないっていうことがいいのかなあって気がするんですよ。これがテレビだったらチャンネルかえちゃう人がいると思うんですけど、芝居の場合はこれでいいんじゃないかなっていうか、見やすい必要はないかなっていう。雑然とした感じが僕らしいかなと。

キャストメンバーはね、多分ワーマンシアターに全部出てる人って猫背（椿）さんだけなんですけど、何がわかんないけど、やっぱり面白いんですよね、見てて。笑える感じが好きなんですよ。出てきただけで笑える感じ。この人何するのかなって、きっと面白いことするんだろうなっていう感じが、伊勢さんとかもするじゃないですか。伊勢さんがレオタードで出てきただけで、「ホントもうあんなもう面白いです」って言っちゃう感じが好きなんですよね。なんか、可哀想な役やってもね、痛くないっていうか、可哀想すぎないじゃないですか。一生懸命やってんのに、空ぶってる感じが好きなんです。なんかやっぱり報いた感じに最終的にしたいんですよね。あんまり主人公っていうのは好きじゃないっていうか。だからドロドロした話とかも猫背さんとかやってたらいいやっていう、面白いから（笑）。

今回芝居に関係をまた増やしたのは、敵えてやったっていうか、最初に、やりたいこと15、6個バーッと書き出して、それをそのまま順番にシーンにしたんですよ。紀伊國屋ホールと紀伊國屋サザンシアターを間違えることが、魚が直接に来てることが、バラボラアンテナを一個ずつ売ってるっていうのとか、竹内力のコントをやりたいなっとか、なんかくビメタばっかりかかってるカラオケ屋とかがあって、くビメタのイントロって全部なんか劇的だからみんな気持ちが劇的になってくるっていうみたいなコントがやりたいなって思ったらそれを入れて、という感じですね。もう、そういうのを全部やろうと思ったんです。これの前のワーマンシアターの『ニッキー』とか、『すぶぬれ』とかやってた時は、コントの仕事が多かったんですけど、このときは演劇でドラマ書いたっていうことはしてたけど、コントっぽいものはずっとやってないなあって思っていて、絶対にコントっぽいものがやりたいなあって思ってたんですよね。

（2000年8月・談）